

南方熊楠と博物学：現代への思想（特集 高校の教科書に出てくる 日本仏教と日本の思想）

著者	笹原 亮二
雑誌名	大法輪
巻	77
号	9
ページ	114-114
発行年	2010-09-01
URL	http://hdl.handle.net/10502/4916

現代への思想

南方熊楠と

博物学

南方熊楠は、一八六七（慶応三）

年に和歌山で生まれた。幼少時から和漢書に親しむ学問好きであった。

地元の中学を卒業後に上京し、大学予備門に進むが、中退して一八八六年に渡米した。しかし、アメリカでも学校は退学、図書館や植物採集で独力で勉強を続けた。一八九二年に渡英、大英博物館で世界中の文献から膨大なノートを作る一方、多くの論文を発表した。

一九〇〇（明治三十三）年に帰国後は田辺に居を定め、熊野の山野で菌類の採集や研究を行い、国内外の専門誌に精力的に論文を発表した。南

方の生涯は「勉強大好き、学校大嫌い」（鶴見和子『南方熊楠』）であった。

◆ 十二支の古今東西

南方の学問は、古今東西の文献から得た膨大な情報と、生物学、宗教学、民俗学、歴史学など様々な学問の知見を総動員する『百科全書的な博物学』であった。代表作『十二支考』でも、十二支の動物を古今東西の伝説や俗信や形質や生態に基づき論じている。その中の「田原藤太竜宮入りの譚」では、竜が依頼した「俵藤太の百足退治から説き起こし、世界中の伝説や俗信の中の竜を論じ、更に蛇、トカゲ、鰐、鮫など竜のもとになった動物を検討し、竜という架空の動物を人々が創造したプロセスの多様性と普遍性を提示している。

◆ 因果と縁の博物学

南方は、ある実在の動物から直接

竜が生まれる単線的なプロセスではなく、世界各地の様々な動物に関する伝説や俗信が出会い、相互に作用して変化を来す複雑なプロセスを経て竜が生まれたと指摘する。西欧の近代科学は、同じ原因から同じ結果が生じるとする因果関係を基本とするが、実際は、同じ原因から異なる結果が生じる場合もある。そこで南方は、「一因果の継続中に他因果の継続が竄入し来る」という「縁」（南方の土宜法竜宛書簡）を考えた。複数の因果関係が出会う「縁」によって、それぞれの因果関係単独とは異なる結果に至るのである。

南方の因果と縁の博物学は、そんな現実世界の森羅万象に丸ごと向きあい、その多様性と複雑さと普遍性を精確に捕捉しようとした壮大な試みであったのかも知れない。（笹原）